

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

フロベールの写実主義とグロテスクの〈美〉

氏 名

山下 英夫

論 文 内 容 の 要 旨

「写実主義」という一つの文学潮流の始祖と見なされたフロベールであるが、残された彼の膨大な書簡に目を通すと「グロテスク」に関する言及が散見しているのを確認することができる。本論文は、写実的手法で執筆された彼の作品とグロテスク概念との関係を明らかにしようとするものである。

第1章では、「グロテスク」という語がいったい何を意味するのかその語源に遡り時代の流れに沿ってその語の用法を調べ、定義の変化を確認した。19世紀になると「グロテスク」はユーゴーによって明確な概念が与えられ、フランス文学に導入されることになるのである。『書簡集』からは少年期のフロベールが彼のグロテスクの美を知っていたことがわかる。そのことから彼の創作がその影響下になされたのではないかという疑問をもち、初期作品におけるユーゴーのグロテスクの美の影響について考察した。またユーゴーとフロベールのグロテスクの美の相違も明らかにした。

第2章では、近代人ブルジョワがはらむグロテスクな性格について考察した。『書簡集』に目をとおすとフロベールが一貫してブルジョワを批判的にとらえていることはあきらかであるが、それにもかかわらず彼がブルジョワに対して強い魅力を感じていることが述べられている。本章では、この一見矛盾した二つの見方がフロベールのグロテスクの両義性によるものではないかと仮定し、少年期にフロベールが友人たちと演じて遊んだギャルソンなる人物や、初稿『感情教育』、『ボヴァリー夫人』、『感情教育』に登場するブルジョワたちを対象に彼らの性格や行動を分析し、そのことを証明した。

第3章では、滑稽さとグロテスクの関係について考察した。「グロテスク」という語は本来「滑稽」なものを形容する際に用いられていた。フロベールは「もの悲しいグロテスク」*« le grotesque triste »*と名づけられた笑えない滑稽さを美学的に生みだしているが、

本章ではこのような倒錯した滑稽さがどのようなかたちでフロベールの作品に書き込まれ、またどのような美的効果を作品にもたらすことになるのか、少年期からフロベールが愛読していたラブレールのグロテスクの理論などを通じ明らかにした。

第4章では、フロベールが身体をグロテスクなものとしてどのように描きだしているのか考察した。古典主義の作品では美の規範にしたがい主人公の身体は理想的に描かれるのが常である。それに対しフロベールの作品では主人公の身体はかならずしも理想化して描きだされておらず、病や獣性、物質性をともなった形で描きだしている。本章ではこのように醜く描かれる身体像がどのような美的効果を作品にもたらしているのか考察し、その結果、身体の醜い面が写実主義においては真実として重要性をもつということを明らかにした。

第5章では、フロベールが、道徳的にどのような倒錯した美を描きだしているのか考察した。1857年に『ボヴァリー夫人』が公衆道徳、及び宗教を侮辱したとしてピナール検事によって訴えられることになるが、本章では『ボヴァリー夫人』に描かれたいかなる面が訴訟問題に触れることになったのか明らかにした。また『書簡集』に目をとおすとフロベールが少年期から反道徳的作家の旗手であるサドの作品に魅せられていたことは明白である。このことからフロベールがサドからどのような影響を受け、それをもとにどのような美を生みだそうとしていたのか考察した。考察の結果、フロベールが、古典主義が美の規範として定めていた「真善美」において、「美」を「善」から切り離し、「美」を道徳に従属することのない絶対的なものとして表現しようと考えていることを確認することができた。

第6章では、フロベールが写実対象とした現実がどのようなものとしてとらえているのか考察した。現実やありのままの自然は、確実であると信じられている人間の知性を超越し、理性を脅かすものとしてとらえられており、写実主義の枠組みの中では、不条理なものとして表現されていることを実証した。

本論文では、現実の再現をめざす写実主義的作品の根底に、グロテスクの美がいかに取り込まれ、反映されているのか考察した。フロベールのグロテスクの美が、人間の理性や合理性の限界を暴露するものであり、不条理なものや矛盾したものが宇宙的総体性との関係のなかで捉えられ表現されているという結論に達した。